

■中国も大型連休

2004年の5月の大型連休は、『四川省最高峰「ミニヤコンカ(貢嘎山)」展望の旅』というN観光の企画する旅に山登り中間の4人で行った。

中国では5年前から3つの長期連休が制定された。つまり、旧正月連休(春節)、5・1国際労働節(メーデー)、10・1国慶節(建国の日)の各連休でそれぞれ7日間の休日だそうだ。制定の目的は物流の振興、特に観光業や運輸業の活性をはかるのが目的。したがって中国の観光地は、どこも大にぎわいなので、日本から中国へ旅行するときはこの時期を外すのが賢明らしい。

しかし、現役で勤めている場合はそうも行かず、混雑を承知で出発。やはり5月1日発の成田発成都行き飛行機は満席だった。

成都に泊まって翌日から、メンバー4人は、旅行会社差し向けの女性ガイド邵^{シヤオ}さん(20代)と運転手の青年(30代?)、トヨタのワゴン車(新しい)で目的地の「海螺溝^{ハイロウコウ}」へ向かった。快適な高速道路や、近年開通した「二郎山トンネル」の恩恵をけて、1日で麓まで着いてしまう。しかし、山の天気は、甘くなく、『「ミニヤコンカ」展望無しの旅』になってしまった。年間2000ミリもの雨が降る(東京は約1500ミリ)土地なので、運を味方にしないとだめらしい。

■ミニヤコンカとは

「ミニヤコンカ」とは、ご存じの方も多いと思うが、四川省最高峰で7556m。1932年に、わずか4人のアメリカの登山隊が北西稜から初登頂(彼らは、揚子江を舟で遡って重慶~成都経由で入山)。1957年に中国隊が第2登、1981年北海道山岳連盟登山隊が未踏の北東稜から頂上を目前にして滑落事故が発生、8人の隊員が死亡。その翌82年には千葉の市川山岳会隊の2人が遭難し、1人が下山中死亡、松田宏也氏が絶望視されながら、薬草採りに来た地元彝族の人に発見され、奇跡の生還を果たした。その発見場所が「海螺溝」なのである。

時は流れ、中国も観光産業が発展して、ミニヤコンカの氷河の末端までゴンドラが架かってしまった。その名

は「海螺溝氷河の森林公園」、中国版「上高地」といったところか。

「森林公園」の入り口は磨西^{モーシイ}という名の街で、二つの平行する川にはさまれた緩やかな傾斜地に街が展開している。標高約1600m、古い家並みをもつ小さい街だ。

■磨西の印象

われわれは磨西のホテルに5月2日午後着、その名も「海螺溝長征大酒店」。なぜ「長征」が付くかという、この磨西も共産軍の長征の経路になっていて、「毛沢東同志住地旧城址」という歴史的建物もあるためだ。しかし今は、「長征」は客寄せの看板に成り下がってしまって、ホテルの従業員は赤い腕章を着けた人民服がユニホームだ。まじめなのか、おふざけなのかちょっと、違和感を覚える。荷物を置いて街を散歩。「毛沢東同志住地旧城址」も観光入場料3元を払って見学。普通の民家であった。隣に、フランス人宣教師が建てたキリスト教会「天主堂」があり、西洋の布教活動のエネルギーを感じる。街の中ほどに畑を潰したような広場があった。そこには野菜を並べた貧弱な露店があり立ち寄ってみたが、午後の時間帯のためか売れ残りのようなものばかりで、面白くなかった。

あくる日5月3日、食事前に再び街を散歩。ホテルの敷地を出るところにある門で、人民服の警備員に敬礼して街へ出た。坂の街路を上り、突き当たったところに「海螺溝氷河の森林公園」の入り口のごつい屋根付きの門があった。蛇腹式の鋼鉄製ゲートは閉まっているが、左隅に、公園内に住まいのある村人のための、フリーパス出入口がある。そこを明らかに観光客とは容姿の異なる地元民が、ひっそりと、ひとり徒歩で通り過ぎた。このゲートの中に入るのには、入場料は60元、専用のバスで往復してくれるようだ。一般の車両は入れない。(専用バスは繁忙期だけなのかは不明)。

見物している間に、どこからかバスがやってきて、観光客を「海螺溝氷河の森林公園」の門前にはき出す。鉄柵沿いにはすでに20人程度のだかりができて、声高に喋り、落ち着かない様子である。行列を律する鉄柵が傑作だ。高さは、腰上ぐらい、幅は人間がやっと通れるほどで、途中に無駄な隙間ない。たとえば、二つの櫛を向かい合わせにして食い込ませたようなかたちの通路で、牛追いの柵のようにも見える。絶対に割り込みは許さないという当局の強い決意を感じる構造だ。

ここを後にして、来たときは別の、もう一本の街を上下に貫く北側の路を下る。途中、前日観た市場の空き地を通りかかると、これは予想外、大賑わいの朝市である。持ち寄った野菜や果物を売りさばく、中国ではおなじみの風景だが、商品に「タラノメ」や「コゴミ」、「ネガマリダケ(これは茹でてあった)」など、日本と同じ山菜があるのは、興味があった。そういえば成都からの道中に立ち寄ったレストランでも「ワラビ」がでた。



磨西(モーシイ)の旧市街

日本の気候に当てはめると、本州中部以北の山村と同程度の気候かな。観察すれば周りの植生は緑豊かで、慣れぬ小鳥も多く、気持ちのよい散歩であった。

ホテルに戻って8時の朝食後、朝観た「海螺溝氷河の森林公園」の入り口まで、成都から乗ってきたワゴン車で移動。歩いて10分ぐらいの距離だが、我々はお客さんなので歩くことは許されない。この頃すでに9時ぐらいになるので大勢の観光客が入り口に集まっている。邵さんの指示に従い、牛追いの鉄柵の列に加わる。観光地区の入場券は80元。待っている間にも、観光客を満載したバスが次々と到着して、観光客の列が伸びるが、うしろの方は、柵がないので団子状になっている。設計人数を超えたので、柵の長さが足りなくなってしまったわけだ。周りは行楽の高揚感たっぷりの元気中国人で、いつにも増して賑やかだ。異境の我々4人はおとなしく彼らを観るのみ。そうやって30分程度の間人観察のと牛歩でやっと専用バスに乗れた。

■「海螺溝氷河の森林公園」へ

乗り込んだバスは、30人乗り程度か。周りは賑やかな、中国人のばかりだ。バスが出発するとすぐに谷底に降り、川を渡る。渡った谷川が海螺溝だ、「溝」とは谷とか溪流のことらしい。橋は鉄骨材の組み合わせで、



磨西(モーシイ)の朝市で観たコゴミ(上)タラノメ(下)

工兵隊が作るような簡易架橋である。水面からも低いので、流されてもかまわない(すぐ作れる)、仮橋と判断した。こういう作り方は、日本でも暴れ川といわれる、氾濫を繰り返す山間部の橋にまれにある。しばらくは、人家もあって、谷間の田園風景である。路は未舗装であるが、よく整備されてなめらかで中国としては快適だ、バス同志が苦もなくすれ違うから幅員もかなりある。

(以下次号)



磨西のまだ暗い朝市

■日中カタコト合戦

磨西からの山道は、途中に「一号营地」、「二号营地」という名のポイントがあり、終点の「三号营地」までバスは行く。延長は30km。「三号营地」からは更に上の「四号营地」に行くゴンドラがあり、そこからは間近に氷河を見下ろし、高みには白銀の山々のすばらしい展望がある。晴ればだ。因みに、成都～磨西間は312kmである、東京～新潟間程度だ。

突然「コンニチハ」と日本語が飛び出た。前に座っていたメガネを掛けた男の子が振り向いて言ったのだ。

この子供や親の10人程度のグループと、バスに乗り合わせたのだが、彼らは、車中ずーっととぎれなく喋りまくっていた。前席少年の「コンニチハ」は身内だけでは喋り足りず、話相手の発展的拡大なのか。彼は次に「What are your name?」と英語で仕掛けてきた。こちらは数人がかり、時にガイドの中国語通訳をまじえて、たどたどしい単語（英語とはいえない）で聞き出したところによると、彼らは学校の先生のグループだという。少年は、英語の塾にて学習中で、腕試しに英語を使いたくてウズウズしているようだ。少年の若い父親も、学者のような容姿で、いかにも英語が堪能そうな感じだった。この場で英語で話しかけられては、我々が英語がダメなの分かってしまう。なるべく質問されないよう、その時点から努めて窓の外の景色を観た。実祭景色が山岳的風景となり、見飽きなかった。よく口の回る、10歳の英才少年だった。

やがて、終点の「三号营地」に到着した。そこは、ちょっとしたバスターミナル風になっていて、一段高みにゴンドラの屋舎があった。天気はどんよりして、山の中腹から上はガスがかかり、展望は望めそうもない。

ガイドの邵^{シヤオ}さんがチケットを買って、入り口に向かったので一緒について行った。料金は160元。ところが、入り口の係員から、邵さんがおとがめを受けてストップ、我々も一緒に足止めになった。彼女は係員としばらくやり合った後、ようやくゲートの中に入れてもらった。邵さんがフンガイして言うには、首から下げている、「ガイド証」の写真と、本人の顔が違うと言われたそう



シャクナゲが花盛り、白や濃い赤の花もあった

だ。このプラスチックケース入りの「ガイド証」の威力はすばらしく、料金が必要な観光地はこれを提示すれば、どこでも入れてしまう。邵さんは似ていないと言われたのがよほど心外だったらしく「似てますよねー」と我々に自分の写真をかざして、同意を求めた。

ここでゴンドラに乗るために再び「牛追いの鉄柵」に並ぶ。観ればかなりの行列で、しばらく待たされそうだった。気が付くと、バスで一緒だった「先生グループ」も10人くらい前方に並んでいた。向こうもこちらに、気が付いた。

一人の女性が「コンニチハ」、「ゴキゲンイカガデスカ」などと言ってくる。

こちらは、「ニーハオ」とか「シェシェ」などあまり意味のないコトバで受け答える。彼らの一人が手に本を持ってそれを観ながら話しかけるので、何の本か見やれば、中国語の「日本語入門」の本であった。うちのツレアイが、そのページをのぞき込んで日本語の部分を読み上げた。

「一ご機嫌いかがですか？」

日本語の部分なら、大いばりで読めるのだ。

そばにいた別な人も、同じような本を手にかざしている。こちらも負けずに、100円ショップで買った「やさしい中国語」を観せた。我々の仲間のAさんも、ナップサックから「指で話せる会話帳」などという、横着な本を取り出して「おれも持っているぞ」という態度を表明した。

列が進むと、彼らと前後に別れるが、蛇行している行列はところどころ押し出されるので、彼らが先に次のヘアピンを曲がると、また相対する。列が長いので、この過程を何回か繰り返す、そのたびにカタコト中国語、カタコト日本語の応酬となった。彼らは、どのような目的で日本語を学習していたのだろうか、聞きそこなってしまった。並んでから1時間ぐらいたって、ようやくゴンドラに搭乗の運びとなった。

■氷河のほとりへ

ゴンドラは8人乗り、黄色い塗装、オーストリア製で2001年7月完成、全長3.5km、標高差420m。日本のスキー場にもある、次々と籠を繰り出す方式である。

乗るとすぐガスの中で、下の河原とすぐそばの絶壁がぼっと見えるだけ、10分ぐらいで終点「四号营地」に着いた。相変わらず、ガスのかかる見通しの無い天候で、展望は望めなかった。

終点駅からは遊歩道があり、大勢の中国人観光客に混じり、石ころの傾斜地を歩いて氷河まで行った。3500mの高地なので、少し息切れを覚える人もいた。

そこへ行くには、歩いて10分ほどなのだが、2人組で肩に担ぐ、大井川の「渡し」のような恰好の籠屋がいて老人や、足弱婦人などがまれに利用していた。籠屋がつかずいて転びでもすれば、まわりは石だらけなので、客はだだでは済まないと思う。歩き方も荒っぽいし、怖



家族連れで温泉を楽しむ

くないのか。事故例はないのか。

氷床を歩いた感じは、氷河の氷は日本の夏山の雪渓より硬そうで、いかにも「氷」という感触だった。色合は砂混じりの乾いていないセメント。ロマンチックではない。

再びゴンドラに乗り、「三号営地」へ戻る。

ここから今晚の宿泊地の「二号営地」にある「氷河温泉休暇村」までそぞろ歩きをして、下ることにした。

「じゃあ行きましょう」

と邵さんに導かれて歩き出すと、予想外、来るときにバスで通った林道をひたひたと歩き出した。このまま林道歩きではたまらんとし、遊歩道……？、歩きながらそれらしき路を探すと、はたして石畳の路が森林内に下っているのを見つけた。

「これを歩こう」

私が小道を指さしていった。邵さんは、この路は知らないといったが、この石畳の道を行くことになった。

石畳なのが気に入らないが、とにかく山道に入ると、針葉樹の森である。枝振り、さほどではないが、強風がないためか高さはずいぶんある。S女の説では、シラビソの類であろうとのこと。サルオガセがずいぶん着いている、湿潤な気候なんだ。途中シャクナゲや、サクラソウの咲いているのをめぐる。

■十大温泉

30分ほど歩いただけで、宿泊地の「温泉休暇村」に着いてしまった。下り一方なので楽なものだ。

四川省には「成都周辺十大温泉」というのがあって、ここはその8番目になっている。8番は、序列ではなく札所の番号のようなものらしい。

公道から近いフロントで手続きを終え、宿舎へ行く。小沢に沿って石段を5分くらい登ると、対岸に渡る吊り橋があり、こちら岸に建物が散在している。その中の一つが今晚の宿である。

吊り橋が「温泉区」の入り口となっていて、川向こうに大小の露天風呂が階段状に展開していた。これに宿泊設備や、レストランが付随している。「日帰り入浴」する人はそばの「出札所」で入浴券(65元)を買い、入浴する仕組みになっている。吊り橋の入り口では、制服

を着た屈強な青年が、入場券をあらためていた。中国も長期休日なので、満員で時間待ちらしく、「温泉区」に入れない人たちが「出札所」の前に並んでいた。中国の温泉は、水着を着用して入浴する。従って男女別無し。男女別の脱衣所に、鍵付きのロッカーがあり、ここに衣類をしまい、水着に着替える。だから、「洗い場」のような石鹸を泡立てて体を洗うところはない。プールの感覚だ。

部屋に荷物を置いて、源泉を見学に行った。吊り橋入り口で、部屋の鍵を見せ(宿泊者はフリーパス)、沢の対岸に渡る。プールのような浴槽が高さを変えて幾つもある。その脇にある階段を上り詰めると、源泉があった。石で固めた井戸のようなところから、碧い透明なお湯が湧き出ている。ここでは源泉のことは「泉眼」という、温度は94度だそう。全設備が「わかし」なのか「かけ流し」なのかは分からなかった。

部屋に戻り、水着に着替えて入浴に行く。幾つもある浴槽は、すべて露天風呂である。5月始めの外気温は、さすがに寒い。ロッカーにタオルなど仕舞い、寒いので遠くに行かず、手近な大きめの浴槽に入る。ややぬるめの温度。泳ぐのにちょうど良い深さなので、抜き手を切っただけ泳ぐが、運動するには温度も高度(2660m)も高いのですぐに疲れてしまう。そこでまわりの中国人のように壁際に、鎮座する。打たせ湯があったり、泡風呂のある日本の温泉とは、勝手に違う。ほかの浴槽も入ってみたがあまり変化はなかった。

浴槽内を移動するときに、中国人の中学生くらいの男の子と軽く接触した。

「△▲▽◇◆！」

なにやら言われて分からなかったが、スローモーションのように意味が届いてきた。

「对不起!(ごめんなさい)」

と言っただけ(私が知っている中国語の単語10個の一つ)。子供はすぐ離れてしまったが、言葉は頭の網に残った。礼儀正しい子供がいることに感心した。

夜に雪が降って、冬景色になった。

翌朝。温泉に入るつもりはなかったが、朝はどんな具合かとまだ暗い6時前に吊り橋を渡って「温泉区」へ行く。露天風呂から湯気が上がっているが、誰もいない。脱衣場の入り口は鎖をかけた「南京錠」で厳重に戸締まりしてある。前夜降った淡雪で通路は所々白い。

そのあと散歩に行き、部屋に戻った。2階の自室窓から温泉を覗くと、ちらほら人がいる。朝は6時が開門らしい。温泉から部屋へ戻る人は、水着姿にバスタオルを掛けただけで寒そう。一人重装備がいて、ハテ何をおっているのかと覗けば、ホテルのベッド据え付けの毛布を、濡れた体に巻いているのであった。温泉、風呂に限れば日本の方が良いと思った次第である。

(本稿中の料金や、各種数字は中国側のパンフレット等に依ったので、一部違っているかもしれません)